

前田家の至宝：尊經閣文庫

「尊經閣文庫（そんけいかくぶんこ）」は、1583年から1871年まで加賀藩（現在の石川県と富山県）の藩主を務め、裕福だった前田家が収集した古典籍、古文書、甲冑、陣羽織、絵画などの宝物を所蔵する施設で、石川県立美術館の「前田育徳会尊經閣文庫分館」では、その中から選りすぐりの品々を展示しています。’

尊經閣文庫の1万点を超える所蔵品は東京に保管されています。前田家は歴史的に金沢と深いつながりがあることから、石川県立美術館では所蔵品のうち約400点の美術工芸品について、所蔵および展示が認められています。

歴史的背景

前田家は江戸時代（1603～1867）初頭には、将軍家に次ぐ財力を誇る日本でも有数の大名となっていました。その豊かな資産を前田家は芸術の振興に注ぎ、多くの優れた工芸品を収集することができたのです。尊經閣文庫所蔵品の大部分は、第3代藩主前田利常（1594～1658）と孫の第5代藩主前田綱紀（1643～1724）が収集したものになります。

歴史的に前田家の所蔵品の一部は、前田家の江戸（現在の東京）屋敷に保管されていました。江戸時代、幕府は各大名に一年おきに江戸に住ませる「参勤交代（さんきんこうたい）」制度を敷いていたため、各藩の大名たちは自身の藩と江戸の両方に屋敷を持っていました。このため1867年の幕府滅亡時、収蔵品の一部は東京にありました。金沢の屋敷にあった残りの所蔵品は、前田家が東京に転居することになった明治時代（1868～1912）に東京に移されました。

前田育徳会は、前田家第16代当主の前田利為（1885～1942）が前田家のコレクションの整理、保存を目的に1926年に東京に設立しました。尊經閣文庫には、国宝22点、重要文化財77点が収められており、単独の一族のコレクションとしては驚異的な数といえます。東京で保管されている品々は大半が非常に古く貴重な古文書で、公開は研究者に限られています。石川県立美術館の前田育徳会尊經閣文庫分館でのみ、一般にも公開されています。

前田育徳会尊經閣文庫分館

石川県立美術館内にあるこの展示室では、展示テーマに合わせて絵画、武具、能装束、茶道具などを月替わりで展示しています。展示品には、前田家伝来の鎧兜、陣羽織、加賀象嵌の鐙（あぶみ）（鞍の両脇につるして足をかける道具）、茶道具、山水画、書などがあります。ごく稀ですが、珍しい工芸見本のコレクション「百工比照」が展示されることもあります。

ここでは、日本有数の武家が誇った名品を、保存状態のよい状態で間近で鑑賞することができます。